

森の通信

宮崎県総合博物館だより

第 17 号

Museum and Cultural Institutions of Miyazaki Prefecture

発行日/平成 5 年 8 月 16 日

発行 / 宮崎県総合博物館 〒880 宮崎市神宮 2 丁目 4 番 4 号 TEL (0985) 24-2071

特別展「宮崎—チョウの世界」 平成 5 年 9 月 18 日(土)開幕!

～自然の中のチョウの不思議さ美しさを探る～



照葉樹林の珍チョウ ヒサマツミドリシジミ

昆虫の中でもチョウ類は、昔から身近な生き物として、愛され親しまれてきました。そのチョウの分布や生活は永い歴史のなかでつくられてきたものであり、それぞれの種類で独特の特徴を持っています。昆虫類の中では、最も研究の進んだグループのひとつですが、まだまだ未知の部分が多く魅力ある存在となっています。また、チョウのはねや形・色彩はさまざま、自然の造形物としての美しさも兼ね備えています。

本展覧会では、身近なチョウから約130種に及ぶ宮崎のチョウの全種を標本で展示解説するほか日本全土や世界のチョウについても紹介しま

す。

さらに、生きたチョウの幼虫や成虫、チョウの切手、ミクロの世界についてもあわせて展示します。(岩崎)

会 期

平成 5 年 9 月 18 日(土)～10 月 19 日(火)
午前 9 時～午後 5 時 (入館は 4 時 30 分まで)
休館日 = 9 月 20・24・27 日 10 月 4 日

入館料

大 人 400(300)円
高大生 300(200)円
小中生 200(100)円

※ ()内は、団体(20名以上)の割引料金

新収蔵資料紹介

河野明綱氏植物標本コレクション

河野明綱氏は宮崎大学農学部植物病理学教室の教授で、専門外の高等植物の採集もされており、1951～1990年に集められた標本をご寄贈いただきました。標本は美しく、分類別に整理されており、その多くは里山のもので、現在は開発され消滅したものも含まれています。

種数は1,076種で3,682点であり、キク科、イネ科、ユリ科、ラン科、マメ科、バラ科、カヤツリグサ科、シソ科等が多いようです。これらの中にはヒロハドウダンツツジ（延岡市可愛岳産：本県唯一）など特記すべきものもあります。またタカサゴソウ・ヒキヨモギ・ミシマサイコ・

オオトモエソウのような絶滅が危惧され、見ることが難しくなった植物がかなり含まれており、これらがかつては身近な植物であったことを何わせてくれます。（南谷）



ヒロハドウダンツツジ(宮崎県唯一の採集)



さまざまな庶民生活資料

近代の庶民生活資料

— 昭和も遠くなりにはけり —

このたび、宮崎市内在住の鳥丸洋氏と二宮義孝氏から、昭和時代前期の資料を中心とした近代の庶民生活資料が寄贈されました。

宮崎県で最初のテレビ、蓄音機や戦前にパスガールにより吹き込まれた宮崎名所案内のSPレコード盤、真空管のラジオやゼンマイ仕掛けの掛時計、戦時中に発行された紙幣や軍事債券、古銭類、自転車の前照灯として用いられたカーバイドライトなど。これらの中には、現在では眼にすることができなくなった貴重な資料がたくさん含まれています。私たちにとって最も身近な時代—昭和時代の様々な資料が、最近急速に姿を消しつつあるのは残念なことです。（津隈）

陶磁器3点



松山祐利氏

岐阜県在住の陶芸家、松山祐利氏から自作の陶磁器3点が寄贈されました。

松山氏は、大正5年都城市に生まれ、武蔵野美術学校に進み、陶芸家の富本憲吉に師事しました。全国の土を求めて10年間模索し、

昭和30年、岐阜県土岐市に窯を設けました。志野、信楽焼を学び、自然釉を用いた独自の作風を展開しています。

昭和55年には土岐市より文化功労者として表彰されました。（高橋）



長首花入(高さ・24.5cm、径・12cm)

染付色絵陶盤(径・32cm)

川志野大皿(径・39cm)

ふるさとの正月

民俗部門では、今年度後半「ふるさとの正月」というテーマで、コーナー展示を行います。

人々は、無病息災、家内安全、五穀豊穡などを願って、さまざまな行事を行ってきました。年中行事、なかでもとりわけ、正月行事は、私たちの生活と結びつきの深い行事です。

県内で、今日も見ることのできる正月の飾りものの代表の一つに、椎葉村の「作祝い（さくいわい）」があります。柳の枝に赤・白・緑の切り餅をさして広げ、その下に小豆・大豆・粟・稗・とうきびなどを結びつけます。さらに、甘藷などを垂らし、粟穂・稗穂のつくりものも垂らします。これらは部屋の柱に取りつけた竹筒にさして飾ります。

本展示では、正月行事のさまざまな飾りものを中心に紹介するものです。（地村）

（展示期間：9月18日(土)～）



作祝い

たしろがはえ 田代ヶ八重遺跡の調査

今回、埋蔵文化財センターに展示される土器・石器などは綾北川総合開発建設事業に伴って発掘調査された田代ヶ八重遺跡（須木村大字中原）で出土したものです。平成2年から3年にかけての県教育委員会による調査の結果、縄文時代前期から晩期の土器・石器が出土し、後期の竪穴住居が2軒検出されました。

まず桜島の南に位置する鬼界カルデラが噴出したアカホヤ火山灰降下後の縄文時代前期（今から約6千年前）になると当遺跡に人が住みはじめ、幾何学的な沈線文を施した曾畑式土器、ミミズばれ状の細隆起線文を施した轟式土器が出土しています。

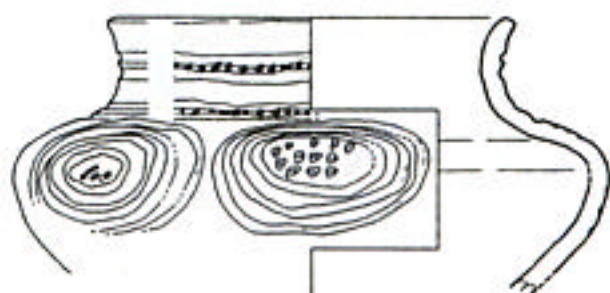
後期（約4千～3千年前）になると隅丸方形の1号住居と円形の2号住居が営まれます。中九州地方の北久根山式系土器・西平式土器、南九州地方の市来式土器・指宿式系土器・綾式土器、北九州地方の鐘崎式土器、瀬戸内地方の福田KⅡ式系土器、黒色磨研土器が出土しており、土器の系譜は種々で複雑な様相を示しています。また、右図の沈線間に貝殻腹縁刺突文による擬

似縄文を施した壺が注目されます。

当遺跡出土の石器38点を用途別に分類すると、打製石鏃などの狩猟用具が37%、打製石斧などの土堀り具11%、石皿などの植物調理用具11%、磨製石斧などの加工具26%、石錘などの漁労具16%で、狩猟の依存度が高い。なお縄文時代は米作り以前で狩猟・漁労・採集の時代ですが、当遺跡の石器組成からもうかがえます。

以上のように縄文時代後期における当遺跡と種々な地域との交流が土器によって知ることができたことが大きな成果でした。（長津）

（展示期間：9月22日(木)～平成6年1月16日(日)）



田代ヶ八重遺跡出土の壺

